
仮面ライダーマグマ

ハナト・バーニングブレイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーマグマ

【Nコード】

N3400Z

【作者名】

ハナト・バーニングブレイブ

【あらすじ】

『仮面ライダーアキア』こと『湊ミハル』が戦っている40年後の世界。

アキアと同じく未来の仮面ライダー、『仮面ライダーマグマ』こと『日野焰』。

少々荒っぽい彼が、過去で見張るが勇気を手にした様に、仮面ライダーとして足りない物を見つけていく物語。

40年後・2051年

深い森の中、不気味なスライムのような黒いモンスターと、真っ赤な体に緑の瞳をした戦士が激突している。

襲い掛かってくるモンスターを避け、赤い戦士はモンスターを背後から蹴り飛ばす。

「ああらよつとおー！」

雄叫びと共に連続でモンスターを蹴り付け、頭上に踵落としを叩き込む。

そしてその場で脚を開き、左脚を軸にして右脚を大地に擦らせる様にして円を描く。高速で何度も回転し、摩擦熱で右脚と周囲が焼ける。そして火が木々に燃え移り、モンスターの周囲を囲む。

「食らえ！」

赤い戦士は勢い良く飛び上がり、空中で一回転して発火した右脚を向ける。

「マグマヴォルテクス！」

技名を叫び、その名の通りマグマの如き炎を纏った右脚をモンスターに正面から叩き込み、左脚でモンスターを蹴り付けて距離を取る。赤い戦士が着地すると同時に、モンスターが断末魔を上げて大爆発する。

爆発で起きた炎がさらに木々へ燃え移り、森を焼き尽くしていく。赤い戦士の腰に巻きついたベルトの正面に着いたプロペラ部分が回転し、周囲の炎を吸収していく。

「ん、エネルギーチャージ完了〜!」

周囲の炎を全て吸収し、赤い戦士は満足そうに伸びをする。するとそこへ、青いメッシュの入った髪の長い青年が駆け寄る。

「お〜い、焰ヒヤメ〜!」

「あれ？ ミハル？」

赤い戦士は焰ヒヤメと呼ばれ、その焰は青いメッシュの入った青年をミハルと呼ぶ。

そして赤い戦士はバックル部分に手を翳し、ベルトはバックルの中に収納され、赤い戦士は棘の様な髪の青年に変わる。

「お前、あの鴻上とか言うジジイに何かされて過去に飛ばされたん

じゃなかったっけ？」

「まあそうなんだけど……。過去の仮面ライダーの人に、明日を守ってくれって頼まれてさ」

「意味わかんねーけど……。何かお前、凛々しくなったな……」

棘頭の青年、『日野焰』^{ひのほむら}は目の前に居る青年、『湊ミハル』^{みなと}の様子が少し違う事に気付く。

というのも、ミハルは焰と共に『仮面ライダー』として平和の為に戦う戦士に選ばれた青年だった。だが彼は戦う勇気が無く、水を扱う仮面ライダー、『仮面ライダーアクア』であるにも関わらず水が苦手だったり、戦う事ができずにいた。そんな彼に、『鴻上フアウンデーション』の社長が謎のベルトを渡し、その力で暴走したミハルは過去へ飛ばされ、『仮面ライダーポセイドン』として当時の仮面ライダー『仮面ライダーオーズ』と戦った。

その間焰は『仮面ライダーマグマ』という炎を扱う仮面ライダーに変身し、平和の為に戦っていた。

で、戻ってきた見張ると再会し、その変化に驚いていた、と……。

「とにかく、俺も今日から仮面ライダーとして一緒に戦うよー！」

「おう！ そりゃありがてえな」

「でも……」

力強く宣言するミハル。焰もそれに明るく返すが、ミハルは周囲

を見渡し、何とも言えない表情を浮かべる。

「森が……」

「あん？」

マグマとモンスターが戦った森は、既に原型が分からないほどに焼き尽くされていた。

ミハルはそれを見て嘆くが、焔は頭の後ろで腕を組み、どうでも良さそうに眺めている。

「別に良いだろ、そんなぐらい。誰か死んだわけでもねえんだしよ」

「けど……木だって生きてるんだよ？ 可哀想だと思わないの!？」

「知るか。つつか、俺達は人間の為に戦ってたぞ？ だったら森ぐらいどうでも良いだろ」

「違う！ 俺達は平和の為に戦ってるんだ！ だったら木だって守ら……ぐっ!」

木を焼き尽くした事に対し、ミハルと焔は激しく対立する。

森よりも人を守る事が優先と言い張る焔に対し、ミハルは森も人間もどちらも守るべきだと言い張る。

だがミハルが言葉を言う途中で、焔がミハルの左頬を殴る。肩を上下させ荒い呼吸をする焔は、倒れたミハルを一瞥しどこかに去っ

ていった。

ミハルは状態を起こし、殴られた頬を手の甲で拭って焔が去った後を見つめていた。

某・幼稚園

数歩踏むごとに舌打ちをしながら、明らかにイラついた表情で焔は歩いていった。

すると自身の卒園した幼稚園の前に辿り着き、園児達と戯れる幼馴染の姿を発見した。

「香奈……?」

「えっ……?」

・
・
・
・

焔は幼稚園のブランコに座り、その横で同じくブランコに乗った、黒く長い髪をツインテールにした少女が焔の愚痴を聞いている。

少女の名は『牛若^{うしわか}香奈^{かな}』。焔とは両親が知り合い同士で、本人達

の仲も良い。

「で、可哀想だと思わないの!? とか言いやがってよお……ったくミハルの野朗、ちよつと過去に行つてきたからって調子に乗りやがって……」

「うん……でも、私はミハル君に賛成かな……」

「はあ!? 香奈もかよ……」

「うん。だって、ここにあるチューリップとかが燃えちゃったら、私嫌だもん」

焔の愚痴を聞き終えた香奈は、少し考えた後、ゆっくり自分の意見を述べた。焔は驚いた様な悲しい様な声をあげ、香奈は頷いて幼稚園の園庭を見渡した。

「ここに咲いてる花達はね? 入園してきた園児達が、心を込めて一本一本大切に育てた花なんだ。それぞれの花に、それぞれの子の思いが詰まってる。そして卒園して行つた子達の花から取れた種が、また次の子達の花になっていく。そうやっていつか、この幼稚園を花でいっぱいにできたらなって……」

園児達と花のサイクルについて、とても楽しそうに語る香奈。太陽の光を受け、その表情はとても輝いて見えた。

一瞬鼓動が早くなり、頬が熱くなるのを感じる焔。慌てて香奈が

ら視線を逸らし、拗ねた様に唇を尖らせる。

「けどよお……」

焰がそうぼやいていると、突然園児の悲鳴が聞える。

焰と香奈が駆け寄ると、氷柱の様な物で体を覆った、ホツキョクグマを模したモンスターが園児の一人を捕らえていた。

「その子を放せ！」

焰は勢い良く突進し、モンスターの顔目掛けて鋭い蹴りを放つ。
一瞬怯んだモンスターは園児を放し、焰は園児を抱えて後方へジャンプする。

「香奈！ その子頼む！」

「うん！」

焰は園児を香奈に任せ、赤いベルトを腰に巻きつける。

「焰！」

するとそこへ、ミハルが変身した青い戦士、仮面ライダーアクアが駆けつける。

焰は一瞬手を振りそうになったが、慌ててその右手を抑えてそっぽを向く。

「何しに来たんだよ？」

「何って……あそつか、今喧嘩中だっけ？」

「その通り！ あいつは俺がやる。お前は手え出すな！」

焰はそう言って一歩前に踏み出す。

左手をバツクルに沿え、右手を開いて顔の左側に突き出す。それをゆっくり右側まで伸ばし、右手を右腰に添えると同時に左手を顔の右側に突き出す。

「変身っ！」

その掛け声と共に、赤い炎が焰の体を包み込む。

そして炎が止み、焰は真っ赤な体の戦士、仮面ライダーマグマに変身した。

「っしやあー！」

マグマは自身に気合を入れる様にして叫び、モンスターに突進する。勢いに任せて拳を放つが、モンスターはあっさりとそれを受け止める。

『フーン!』

モンスターの掛け声と共に、マグマが放った右手が凍り付く。

「んなっ!?!」

マグマが驚いている隙に、モンスターはマグマの懐に重たい蹴りを叩き込む。その一撃でマグマは吹き飛び、アクアの下まで転がっていく。

「焰!」

「こんの!」

アクアの心配も他所に、マグマは口元を拭って立ち上がる。一度右手に力を込め、その熱で右手の氷を溶かす。そして左脚を軸にして、右脚を大地に擦って炎を宿す。そのまま空中に飛び上がり、一回転して右脚を向ける。

「マグマヴォルテクス！」

必殺技名と共に蹴りが炸裂し、周囲を硝煙と爆風が包み込む。それが晴れると、マグマの右脚を掴んだモンスターが見えてきた。

「なっ……!!?」

『この程度か……』

モンスターはマグマを勢い良く振り上げ、大地に叩きつける。

「がはっ……」

その衝撃でマグマの変身が解除され、焔の姿に戻ってしまう。仰向けに倒れた状態でモンスターに踏みつけられ、焔の呻く声が響く。

「はあっ！」

アクアがキックと共に水流を放ち、モンスターを吹き飛ばす。そして焔を庇う様に立ち、独特の構えを取る。

『次の相手は貴様か……』

「はっ！」

モンスターの言葉を無視し、アクアは空中に飛び上がって水流を纏った蹴りを叩き込む。

「アクアヴォルテクス！」

『フン！』

だがモンスターは右手から氷を放ち、アクアの水流を凍らせる。鋭く尖ったその氷を握り、アクアの体を切り付ける。

「ぐあっ！」

アクアはそのまま落下し、大地に叩きつけられる。そして高速でモンスターが接近し、何度もアクアの体を傷付ける。痛みに呻くアクアの右脚を踏みつけるモンスター。骨が碎ける様な嫌な音が聞こえる。

「ぐああああああああああっ！」

「ミハル……！」

叫ぶ声と共に、アクアの姿がミハルに戻る。その右足からは血が吹き出ており、明らかに曲げられない方向に曲がっている。

モンスターはミハルに一瞥し、そのまま花壇の方に進んでいく。そんなモンスターの前に、香奈が立ちはだかる。

「香奈！」

「やめて……。この花壇は、皆が大事に育てたの！」

『…………どけ』

香奈の叫びも空しく、モンスターは香奈を突き飛ばす。

焔は無理に痛む体を動かし、走って香奈を受け止める。その間に、モンスターは花壇の花を踏み荒らす。

「あつ…………」

「てめえっ!」

香奈の悲しむ声と同時に、焔は立ち上がってモンスターに殴りかかる。

だがモンスターはあっさりとその拳を受け止め、そのまま焔を投げ飛ばす。

「がつ……」

上空高くから大地に叩きつけられた焔は、空気に近い呻き声を漏らす。

そして花壇の周囲から、徐々に凍り付いていく。焔は何とか香奈を立たせるが、二人の足元も凍り付いてしまう。

「くっ……そっ！」

『そこで世界が凍り付く様を見届けるが良い！』

モンスターが勝ち誇った様に焔を嘲笑う。

するとミハルが、動けないにも関わらずその場から何かを焔に投げる。

「焔！」

焔はそれをキャッチする。ミハルが投げた物は、古いライターであった。マグマのエネルギー源は火。恐らくそれでエネルギーをチャージしろという事なのだろう。

「サンキュ……」

焰は白い息を吐きながら、ライターに火を灯す。だが、手が悴んで上手くドライバーに近づける事ができない。そしてそのままライターの落下し、氷の溶けた水で消えていってしまう。

『足掻いても無駄だ。その程度の火では俺を倒すことはできない』

モンスターはそう言った後、さらに花を踏み躪る。それを見た焰は、悔しそうに拳を握り締める。

「てめえ……その足をどけるよ！」

『なんだと……？』

「その花たちはなあ……ここの園児達が、一本一本丁寧に育てたんだよ！ その種が次の子達に受け継がれて……ここの幼稚園を！ 花でいっぱいにするのがこいつの……香奈の夢なんだよ！ 邪魔すんじゃない！」

「焰……」

焰はそう叫び、香奈が嬉しそうに焰を見つめる。先程までの荒っぽい焰とは違う、花を気遣う気持ちが芽生えた焰に、香奈は嬉しさとそれとはまた別の感情を抱く。

『クハハハハッ！ その状態で何ができる！ 貴様はそこで世界が

死滅するのを見届けていれば良い』

既に凍りはミハルに近付いており、ミハルの表情にも焦りが見え始める。

焔が唇を噛み締めると、ライターに残った小さな火が見えた。その火に、踏み付けられて茎を折られた花が近付いていく。

戦って

「えっ……」

幻聴かも知れないが、焔の耳には花が応援している様に聞こえた。そして小さな火が花に燃え移り、そのまま周囲の花にも燃え移っていく。

『ぐおっ！？』

突然足場が発火し、モンスターは驚いてその場から下がる。その結果氷の広がりも収まる。だが、花壇は炎に焼き尽くされてしまう。

「ごめんな……折角綺麗に咲いたのに、こんな風にしまつて……。それと、ありがとな……。お前等の命、無駄にはしねえぜ！」

焰は花に謝罪と感謝をした後、マグマドライバーを突き出す。その中央に花壇の炎が吸収され、マグマドライバーは焰の腰に巻きつく。焰は先程の右手を伸ばした後入れ替える様に左手を伸ばすポーズを取り、静かに叫ぶ。

「変……身っ！」

焰の体を赤い炎が包み込み、その炎が焰と香奈の氷も溶かす。

焰は赤い体の戦士、『仮面ライダーマグマ』に再変身し、花壇の焼け跡を見つめる。

「花よ……俺に力を貸してくれ！」

するとドライバーの中央から、炎に包まれた剣が出現する。マグマはそれを右手で掴み、香奈を下がらせてそれを振るう。

「マグマブレード！」

そう叫ぶと同時にモンスターに突進し、氷柱のようなモンスターの体表を切り裂いていく。切り口にも炎が残り、モンスターの体を溶かす様に燃え広がっていく。

『ぐおおおおおー!?』

氷が溶け、モンスターの体から水が滴る。水滴がどこかに吸い込まれる様に動き、ミハルの持った青いドライバーに吸収される。

「ミハル！」

「変……身っ！」

ミハルはそう叫ぶと同時に、仮面ライダーアクアに変身する。そして右脚を引き摺り、マグマの横に立つ。

「焰も、仮面ライダーになるのに足りない物が手に入ったんだね」

「はっ？」

「俺は勇気が足りなかったから変身できなかった。焰は優しさが足りなかったけど……それが手に入ったから、ドライバーがそれに応えてくれたんだよ！」

アクアの説明に、マグマはドライバーを見つめる。

焰に無かった、花を気遣うほどの優しさ。けれども今は、花に謝るまでに成長した。その結果生まれた優しさに、マグマドライバーが新たな力を与えたのだ。

「そっか……俺もお前も、ようやく仮面ライダーになったって事か……」

『貴様等……』

焰が嬉しそうに呟くと、モンスターが切られた左肩を抑えながら立ち上がる。

マグマとアクアはモンスターを睨みながら、それぞれ似た様な構えを取る。

「ミハル、お前は止め刺すまで休んでろ。あいつの体力は俺が削る！」

「分かった！」

マグマはそう言った後、再びモンスターに切りかかる。
力強い斬劇に、モンスターは体表を削りながらよろめく。

「あいつが技のアクアだとすれば、俺は力のマグマってところかあ！」

そしてモンスターの胴体を殴りつけ、そこにマグマブレードを突き刺す。

「おっしゃー！ 行くぞミハル！」

そう呟いたとき、一瞬マグマドライバーが輝いた。マグマドライバーの中央から赤い光が種のように撒かれ、花壇を包む。そして一瞬の内に焼かれた花達が元に戻っていく。

「うおおおおお！？ な、なんだこれ！？」

「はっ！ お前の欲望が生み出した結果、つてとこか……」

焰が驚いていると、焰の横で赤い右腕が突然喋った。焰はそれにも驚くが、右腕は気にせず花を見つめている。

「いいいいや！ お前誰だよ！」

「通りすがりのグリードだ。覚えなくて良い」

「あっそ」

そう言い残して赤い右腕はどこかに飛び去っていった。

焰は再び花壇に視線を戻し、一度マグマドライバーを見た後、空を見上げる。

「……っし！」

焰は気合を入れるかのように頬を叩き、園庭を駆け抜ける。

そのとき、焰を探していた香奈とすれ違つ。

「あ、焰！ さっきはありが……」

「悪い香奈！ 俺ちよつと行つてくる！」

香奈の横を通り過ぎ、振り向きながら叫ぶ焰。

「ど、どこに!?!」

「どっか！ また花を踏み潰そうとする奴をぶつ潰してくる！」

「そっか……。行つてらっしゃい！」

「行ってきます！ シュツ！」

焰は香奈にそう言い残し、どこかに向かつて走り出した。

その背中を、緑の体に赤いマフラーをしたバツタの様な戦士が見つめていた。

〜END〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400z/>

仮面ライダーマグマ

2011年12月11日18時47分発行